

平安浄土教信仰史の研究（博士論文要旨）

伊藤 真徹

（一）

国史の領域で量質ともに重要な部分を占める仏教の歴史について、教団史的または教理史的研究は刮目すべき成果を挙げているが、従来は教化者を含めた被教化者の宗教的実践を主体とする信仰史の研究が閑却されていたことは遺憾である。

本論文はかかる観点から平安時代の浄土教信仰史を解明するため、三篇十四章に分ち比叡山浄土教の信仰史の確立を意図した。第一篇叡山浄土教信仰の展開は、叡山浄土教の展開を信仰史の立場より通観すると二期に区画せられ、その分岐点は良源の没年であり源信の『往生要集』成立の年時（九八五）とすべきである。前期の特色は最澄・円仁、とり分け円仁の教学、信仰実践の浸潤時代である。常行堂の建立、そこで行われた五台山将来の念仏、それ等の普及度は往生伝等によって知られる。円仁の平素所修の行業は多元的であって、それ等を継承する弟子等は一家を樹立し、その譜脈を跡づけることができる。この期の末に法師・沙弥と称される肉食妻帯者、または造悪人の念仏往生のことが語られるが、慶滋保胤はこれを黙殺していることは、彼自身の堅持する孤高性によるものであろう。

平安時代後期の浄土教信仰史の特色は『往生要集』の思想の浸透である。『往生要集』は源信の宗教体験の告白書であり、他面先賢古徳の思想・行動が彼の体験を濾過して彼の思想体系のなかに位置づけられている。その例は臨終に願文を持つこと、臨終行儀等に見られる。源信自身いう如く、「求_三極樂_一者。不_三必專_三念仏_一。須_下明_三余行_一。任_三各樂欲_上。」とあって、天台僧として立場が復活し、『往生要集』に諸行を説き示している。よってその教説を信奉する後期の往生人の行業は多様である。またそれ等の複合もあつて類型的に整理することは困難であるが、蓋然性によつて分類を試みた。

念仏信仰の源流は叡山の常行堂を拠点としたが、この常行堂が都市、地方に分散建立せられて念仏運動が拡大し、阿弥陀堂の建立等によつて念仏信仰が興隆した。寺院が信仰運動の中核となることは言うまでもないが、恵まれた立地条件によつて上下の信仰を集めたのは四天王寺である。『四天王寺御手印縁起』に荒陵の東の地は「昔釈迦如来転法輪所」とあり、さらに宝塔・金堂は「相_三当極樂土東門中心_一」とあるので、この縁起の説によつて、後世忍性は衡門に表して、「釈迦如来転法輪所当極樂土東門中心」の額を掲げて極樂の此土における標識とした。この『御手印縁起』の出現が、四天王寺と浄土教を結合させる基礎となった。同縁起奥書の要旨によれば、この縁起文は金堂に納められ、濫りに披見することを許されなかつたが、寛弘四年（一〇〇七）八月一日、金堂の六重塔の中より都維那十禅師慈運が発見し、この時点から浄土教を踏まえた四天王寺信仰が興つた。

『御手印縁起』の発見は貴族社会に太子の政治理念を確認せしめ、さらに仏教外護と寺院建立、及びそれ等に伴う資財田園の寄捨、広く人民救済者は身分の如何を論ぜず太子の後身なりとの予言、四天王寺を尊信する者は一仏浄土の縁を結ぶとの内容の普及によつて、四天王寺信仰は広く一般社会に徹底された。なお当時貴族間において醸成された風潮は社寺の巡拝であつて、初期においては南都の諸大寺詣での往還に天王寺に詣るといふ形式であつた

が、後には天王寺詣でを目的とするに至った経路を資料によって知ることができ、さらに天王寺念仏という集団念仏が結集せられ、それに参加することを目的とし、長期にわたり滞在し、その間西門を中心とした浄土教儀礼もとり行われた。

貴族の信仰を天王寺に収斂した他の理由の一は、当時の四天王寺別当が公家貴頭に接近した効験僧、またはその出身が高貴であつて、貴族社会との接触が容易であつたことを注視すべきである。

浄土教信仰史の資料源となる六往生伝の成立は『日本往生極楽記』を根本とし、他はその遺漏の修補と続篇の性格を持つものであるが、その間各成立過程には幾多の解決すべき問題が横たわつてゐる。撰者の社会的地位、教養と生活環境、交友関係の個人差により、各続篇の口頭伝承を筆受したと思われる部分に特色が見られる。

文人貴族によつて手記せられ、当時広く世間に公表せられなかつた記録中に、いわゆる「異相往生者」に匹敵する近親の往生に対する感激記事の存在することは見逃すことができない。その他『扶桑略記』、『本朝世紀』、『百練抄』の史書にも、その例を二三見出すことができる。よつて往生伝作者の伝聞以外に、なお多くの往生人の資料が眠つてゐることが判る。

往生伝を研究することによつて判明する事實は、その編纂の体裁によつて撰者自身の性向を自ら知ることができ、また概括的には信仰の型態をも知ることができる。例えば慶滋保胤は四衆の順序によつて伝記を配置し、さらに身分によつて念仏の内容を分け、序には悪人の往生を引きながら、日本の例は一も挙げていない。大江匡房は大江一家の往生者四名の伝を収録する付帯事業とも極言せられる往生伝編集である。よつて内容の伝記の配列順序は官僚優先の精神が反映している。僧侶についても官僧を先きとし、無官の僧を後としている。また宿善の思想を導入し、悪人往生に随喜渴仰の賛辞を呈している。

三善為康の往生伝の成立についても『拾遺往生伝』三巻は、一応上中二巻と下巻とに区切って考え、また『後拾遺往生伝』三巻をも含めて、全体六巻のうち第三巻以前と以後に分けて特色が見られる。その信仰は序文に明らかであり、『拾遺往生伝』上中二巻に収録せられる伝記の配列は男性の出家・在家、女性の出家・在家と追記二名である。この点より見る限り慶滋保胤のタイプを継承する信仰内容と判定される。

蓮禪の『三外往生記』は為康の往生伝と重複する伝記が収載されていることは興味深い。記事の相違は両者の信念の相違と伝承経路の相違を物語るものである。また新出の往生人は地方の無名僧が多く、亡年月も不明であることは、下層社会に伝承せられている間に脱落したものであり、捨身往生者を取り上げていることも特色である。

宗友の『本朝新修往生伝』は慶滋、大江、三善三氏の往生伝の補遺・続篇として四十二人の伝を撰集したものである。宗友の感銘を深くしたのは、「往生極楽は信心にあるべし^{云々}」という為康の臨終の言であった。平安時代の浄土教信仰の底辺を流れていた形式主義の否定、それに替る信心の強調、かくの如き信仰型態交替の胎動により、次代に大きく展開する鎌倉新仏教の息吹きが感ぜられる。

(二)

第二編に論ずるところは、一般に寺院が持つ機能は教化センターとして多様であつて、一概に規定することはできないが、最大公約数的には祈願と修道の二面性を持ち、極楽を髣髴せしめる莊嚴を施すなど、それ自体信仰を培養するに足る機関である。この道場において修される浄土教儀礼も多種多様であつて、概括的には平生と臨終の儀礼に分けられる。さらに平生の行法としても集団的と個人的行業に類別することができる。またその修すべき儀礼の日時期間も年間定期的回数、例えば春秋二期、または春夏秋冬の四季の如きであり、又は月例定期的に行われ

るものと、任意に適宜行われるものとに分けられる。さらに自行を目的とする念仏行それ自体が、結縁来会者に多大の感銘を植付け、来会者自身を念仏信仰に導入する不作為的教化の一面を持つものと、念仏行自体化他を目的として修し、来会者の視聴覚を介して、浄土往生の念を積極的に増進せしめる一面をもつことに分けられる。

不断念仏、百万遍念仏は不定期的であるが、勸学会、二十五三昧会は定期的である。不断念仏と百万遍念仏は自行を中心とするが、結縁来会者には不作為的教化を及ぼすものである。元来浄土教儀礼そのものは自行を目的とするが、同時に化他を兼ねるものである。そのなかで化他そのものに主力がおかれ、しかもその行修によって自行の策励となり、その功德の還元せられることを願うのは講会である。その勤式を規定したのが講式である。浄土教の講式中異色のあるのは『順次往生講式』であって、当時の貴族の嗜好を満足さすにたる音楽の要素を導入している。特に雅楽・催馬楽の歌詩は各異れる旋律によって陶醉境に誘い、芸術美によって仏教の深旨を知らしめる効用がある。迎講は音楽を伴い動的立体的に、現実にあらまほしい宗教的神祕の世界を具象化する総合芸術である。『順次往生講式』は音楽を中心として理想的世界を表現し、ねがわしい心を養わんとする静的聴覚中心の宗教儀礼である。迎講は堂内または堂外何れにおいても行われ、多人数によって構成せられるが、往生講は堂内で一人を中心として行われるのを本体とする。ともに結縁参加者に自己を含めて宗教的感動を与える点、信仰培養のため等しく大なる意義を持っている。

以上の各浄土教儀礼の成立と展開に関して論及したが、不断念仏は円仁が中国から将来した五台山念仏を母胎としたもので、源為憲の『三宝絵詞』に大要が述べられている。往生伝その他の文献によりその実修と転訛、意義の変容を知ることができる。勤学会は慶滋保胤を中心とする大学学徒及び山門の学侶が三月・九月の十五日集合して行った。その仏事の内容は講經と念仏、作詩、朗詠、誦偈等を中心とする、いわゆる「法の道」と「文の道」をた

がい増進する機会とした。この花花しい発足に拘らず、早く衰退した原因と、法興院勸学会復興についても言及するところがあつた。

二十五三昧会は根本結衆二十五人連署の発願文により、結衆の員数、結衆中の病者についての盟約と、十五日の念仏三昧により往生を念ずることを合議決定しているので、その構成・目的・内容が知られる。また発願文の冒頭に「三界皆苦、五蘊無常、苦与無常、誰不厭乎」とあるので、その思想的根柢は『往生要集』の第一厭離穢土門によることは明白である。二十五三昧会の実修に関する『起請八箇条』と『定起請』との関係と、各その使命と特色役割について明確にすることができた。なお『二十五三昧式』の内容と『往生要集』について研究を進め、この二十五三昧会も歴史の積み重ねと共に、追善儀礼化したことについて、文献資料により明らかにした。

迎講は源信の創始であつて、その起源は平維茂に与えた迎接曼荼羅に崩している。直接の始源を物語るは『古事談』巻三、『私聚百因縁集』巻八である。この望ましい往生浄土の儀式が各地に普及していたことは、往生人の臨終の瑞相の告白のなかに、しばしば物語られていることよつて知られる。かつて視聽覚による教化の機能をもつた迎講も、平安末期以後には追善の儀礼として行われるようになった次第を、伝えられる実例を挙げて歴史的に示した。

臨終行儀は善導の『觀念法門』に出で、源信は『往生要集』の大文第六別時念仏に踏襲している。従つて『往生要集』を指南書とする実践集団ともいふべき、二十五三昧会衆の規約即ち二種の起請に、結衆の病者を別処に移住せしめることを定めている。この阿弥陀仏に迎接せられ、または迎接せられる宗教的神秘的瞬間を具象的した作法は、平安時代後期以後広く僧俗の間に行われた。仏と往生人とき結ぶ五色の絲の心理作用は、環境の調整と共に往生人を極楽に誘う最善の方途となつた。

百万遍念仏の起源は『木槵子經』に出で、中国では迦才が『浄土論』にこの説を引いている。その趣旨は念仏に心念と口念とがある。口念について『木槵子經』により口称念仏は心を散乱せしめぬので、念仏百万遍以上すれば往生すると判断し、道綽は七日の念仏により百万遍の念仏を称えた実証としている。わが国では源信が『往生要集』に尋常の別行を説き、そのなかに迦才の『浄土論』を引用して百万遍念仏のことを勧めた。この百万遍念仏は源信が『往生要集』の成立以前より強調していたことは、往生伝を検討することにより判明する。この種の念仏は後世盛んとなった天王寺念仏と云う結集念仏を産み、種々に変容して祈願、追善のために修し、功德の融通の思想をも産むに至った。

(三)

第三篇の平安文芸と浄土信仰においては、元来詩歌は感動の情を文字に表現したもので、その感動の再現は文字が音声で出でるべき筈である。それによって一人の感動が多数の他者に伝達せられ、信仰伝達の役割りも持つものである。凝然は『声明源流記』に「声相清雅、悦_レ諸人耳、音体哀温、快_レ衆類心」といみじくも喝破し、師鍊は『元亨釈書』卷二十九に「楞嚴曰、此方真教体、清浄在_三音聞、声韻之作也_レ有_レ以矣、吾仏六十四種、頻伽梵音、令_レ人樂聽、豈非_三撰化之巧便_一乎」と、各その重要度を強調している。その内容が俗耳に入り、理解に直結する和語の詠唱はなおさらと云うべきである。

仏教信仰の流伝には唱導、即ち演説の重要性は言うまでもない。師鍊は「自_三從吾法東伝、諸師皆切_三於論導_一矣」と述べている。法を伝達する形式には文字によるものと、音声によるものがある。教育または印刷技術の発達普及せぬ古代にあっては、文字により大衆に理解を勧めることは至難である。迦才の『浄土論』三巻は極楽浄土とそ

の浄土に生れる機を判定し、理論と実例を挙げて凡夫往生の可能を明した書である。迦才は「上引経論二教証_二往生事_一実爲良驗_二但衆生智淺不_レ達_三聖旨_一未_レ若_下引_上現得_三往生_一二人相貌_{勸_レ進其心_上」と述べて、道俗二十人の往生の実例を挙げてゐる。浅智の者たらずとも実例・譬喩・因縁譚が教説の主旨を理解助成する効用は、量り知れないものがあるので、釈尊もしばしば用いられたところである。仏教説話文学の成立の動機が唱導のためとか、趣味として行われたとか論者の見解によって異なるが、いま前者の立場をとれば、仏教説話文学は唱導の譬喩・因縁譚の宝庫と称すべきであつて、信仰鼓吹上俗耳に強く印象せしむべき例話のみである。}

初めに平安時代の文芸作品の随一に数うべきものに、知恩院蔵『順次往生講式』がある。本講式の特長は述意門と正修門の各段及び回向門に舞樂が伴い、正修門には樂と共に催馬樂の曲を付し、歌詩は西方浄土の有様や快樂の様子を歌いあげ、自ら極樂浄土を欣慕せしめることにある。平安時代に公卿の仏事に管絃供仏のことを記録し、朗詠今様のことを仏事に伴わしめことを伝えているが、本講式はその状況を明らかに知る一資料である。内容の検討によつて成立年代、作者等の問題を解決することができた。また大原來迎院所蔵の『極樂声歌』は、魚山に伝えられる秘書である。その内容はいささか錯簡があるが、『順次往生講式』の歌詩のみを抽出して編集したもので、むしろ『順次往生講式』に脱落したのではないかと思われる部分を温存している点、貴重な資料といふべきである。

『今昔物語』は唱導の補助材料の宝庫とせられるが、卷十五は往生伝であるとの見解が主張せられている。卷十五の五十四の説話の素材は既存の資料によつてゐるが、撰者はさらに当時世間に流布してゐた伝承説話を発掘採集したようであることを明確にした。卷十五のみに限らず、「本朝付仏法」の全篇について、諸種の行業により臨終に異相を現じた往生人があるのが当然である。即ち教学と信仰、または現当二世の利益觀念によつて、終局的には極樂浄土を求めたのが古代人の信仰構造でなかつたかと思う。この観点より多くの往生譚を抽出することができた。

古代の歌謡の持つ特性は宗教意識、特に民族共同体的信仰の精神を内容としているものが多い。宗教意識は中世に仏教精神と替えられた。古代の宗教心の表現形式は集団的であったものが、後には個人的、儀礼的なものとなり、さらに自己内心の奥底からの欲求として溢れ出るものとなる。従ってこれ等は民族信仰世界から遊離して、個々の心奥に横たわる宗教意識を自覚めしめ、共感を呼び起さず結果に移行した。よってこの社会で謡い弘められた歌謡には、自己内心の奥底から響き出したものと見なすことのできない知性的、教訓的なものが多い。

勸学会またはその他の機会に、文人貴族によって実地に広く朗唱せられた詩文、及び仏歌のたぐいが伝承せられ、『倭漢朗詠集』の編集となった。この集の詩句全体が一般社会の上下で盛んに朗詠せられたとは速断せられぬが、好んで愛唱せられた佳句が固定化し、朗詠の専門の家柄が成立すると同時に、貴族社会の嗜好に応じて広く行われた。この佳句詠唱の風潮は宮廷の諸行事にも取込まれ、これが仏家の社会にも影響を及ぼした。仏家の社会においても庶民と交渉の多い下級僧侶の間に下降して行われて、庶民の間に流行の萌しをもたらした。この傾向はさらに遊女、白拍子によって取り上げられて宴席においても行われ、いわゆる「うたい物」の世界に下降するに至った。このことは『倭漢朗詠集』下巻「仏事」の和歌二首が、『梁塵秘抄』の「無称歌」中に納められているので、朗詠時代から今様時代にまで受けつがれたことを実証するものである。かくの如き例は『梁塵秘抄』の検討によって明らかにせられる。

さらに『梁塵秘抄』の中、浄土教に関連をもつ内容を謡ったと思われるのは、「仏歌」二十四首中の六首、「法花經二十八品歌」百十五首中二首、「極楽歌」の六首、「僧歌」十首中一首、「雑法文歌」五十首中四首である。これ等の内容について教理背景を明らかにした。また「二句神歌」の中に『新古今和歌集』「釈教」中にも納める法円上人の臨終行儀歌について、その内容は『往生要集』の影響によることは明らかであるが、その社会的影響はその

詠唱により『往生要集』と比肩すべきものである。

『倭漢朗詠集』から『梁塵秘抄』に至る間に、浄土信仰を謡い表わしたものは、その他の仏教思想を謡うものと比して、数量的には多いとは言えない。少ないにも拘らず浄土教信仰の培養や鼓吹上、これ等の歌唱の役割の意義を大とするのは、時代の信仰が末法思想の浸透により著しく浄土教に傾斜したこと、貴族の登り詰めた権勢の絶頂に、下降の闇黒の宿ることに眼を覆うことはできなかった。かくて宿命的に現在に絶望していた大衆と共に、浄土の実在を信じ、この世を穢土と厭う思いを濃厚にした。よって貴族の権勢の下降線上の初期に表われたのが倭漢の詩文佳句の朗詠であり、次いで世間一般の風潮をなしたのが『梁塵秘抄』に代表せられる歌謡である。この『梁塵秘抄』の成立過程には上流貴族の社会から下降して大衆化したもの、また下層大衆の世界に育ったものが上流社会に吸収せられて行われるに至った生立ちを持つものもある。この両者の仏教歌詠と信仰の問題について論究を試みた。

目次

向

第一篇 叡山浄土教信仰の展開

第一節 慶滋保胤と日本往生極樂記

第一章 良源以前における叡山浄土教信仰

第二節 大江匡房と続本朝往生伝

第二章 源信の念仏思想・往生行儀の受容

第三節 三善為康と拾遺・後拾遺往生伝

第三章 叡山浄土教と四天王寺

第四節 蓮禅と三外往生記

第四章 往生伝の成立

第五節 藤原宗友と本朝新修往生伝

第五章 浄土教信仰史よりみた往生伝撰述者の性

第二篇 浄土教儀礼の諸相

第一章 不断念仏

第二章 勸学会

第三章 二十五三昧会

第四章 迎講

第五章 臨終行儀

第六章 百万遍念仏

第三篇 平安文芸と浄土教信仰

第一章 順次往生講式と極楽声歌

第二章 今昔物語集の往生説話

第三章 詠文学と浄土教信仰

以上